

■ いつかきれいな海岸線を ■

ある村で、台風による崖崩れで社^{やしろ}が流された。村人たちが社跡に集まると、そこには直径1mほどの穴があった。地球の中心まで突き抜けていそうなほど深い感じがする。「おーい、でてこーい」若者がそう叫んで、小石を投げ込んでみたが反響はない。

新聞記者が長い紐を垂らしても、学者が拡声器で調べても、穴は平然とそれを飲み込んだ。学者から埋めてしまうようにすすめられた村民は、新しい社を建ててくれるという利権屋に穴を譲る。利権屋は穴埋め会社をつくり、原子炉のカスをはじめ、地上のありとあらゆる不要物を放り込んだ。

都会は次第にきれいになり、澄んだ青空に向かってビルが次々と造られていった。ある日、建築中のビルで、作業員が頭の上で叫ぶ声を聞いた。「おーい、でてこーい」。作業員が空を見上げても澄み切った青空が広がるばかり。近くを小石が落ちていったのには気づかなかった。(星新一『おーい、でてこーい』)

先週の火曜日、1年生は海岸清掃に取り組んだ。名付けて「オーシャン・クリーンアップ・プロジェクト (OCP)」。波の影響だろうか、漂着ゴミがたまっている場所もあった。これまで大量のゴミを引き受けてきた海が、まるでこれ以上のゴミは引き受けられないと、吐き出しているかのようだ。

OCPは、昨年から始まった。海洋ゴミ、とりわけプラスチックはやっかいだ。細かくはなっても分解はせず、マイクロプラスチックとなって、海洋生物の体内で大量に発見されるなどの報告が相次いでいる。清掃活動と合わせて試料採取した砂の中にマイクロプラスチックなどがどれくらい含まれているのか、今後、含有物を調べる。

さらに、OCPはパネルディスカッションや沖縄県立読谷高校とのオンライン交流会も控える。たった一つの活動から新しい活動が生まれ始めている。これが様々な学校や企業、石川県から全国、そして世界へと活動が広がり、大きなうねりとなっていくといい。

星新一が『おーい、でてこーい』を著したのは、1958年。彼が鳴らした警鐘は、今まさに現実となっている。因果応報。廃棄したゴミは、いつか自分たちに返ってくるということだ。集められたゴミでトラックはみるみるいっぱいになり、海岸と1年生の心はその分きれいになった。不都合な真実から目を背けず、いつかきれいな海岸線を取り戻したい。

